

# Muse

帝国データバンク史料館だより【ミューズ】

2010.01  
VOL. 11  
TDB Historical Museum

古往今来〈特別論談〉

## 博物館という 「知」の玄関の魅力を市民に

明治大学 中央図書館事務長 伊能 秀明さん

TDB交親録 ゆかりの人物 — 交流と親交の記録  
戦後の日本文学の旗手「三島由紀夫」

日本の産業創世記  
世界有数の紙の国 [紙製造業]

シリーズ：史料との対話  
「渡支」申請書類に見る 事業所巡視

戦前期の経営トップによる現地視察と帝国興信所の海外展開を裏付ける「渡支」申請書類。歴代社長の事業所巡視による「現地現認」は現社長にも受け継がれ、今日にいたっている

## 特別論談



明治大学 中央図書館事務長

伊能 秀明さん [いよくひであき]

早稲田大学法学部卒業。法学博士(明治大学)。明治大学博物館前事務長。元東北文化学園大学客員教授。学術資源を活用した「寺子屋講座」、文部科学省委託事業、子ども向けプログラム等に従事。著書に「法制史料研究」1~4、「邪馬台国事典」(共著)、「大学博物館事典」(監修)など多数

# 博物館という「知」の玄関の魅力を市民に

### 1 「ア・ミュージアム」の開講

#### 美術館で、企業博物館で 実体験型の講座がニーズにマッチ

かつて、明治大学博物館では「大学博物館めぐり」というフィールドワーク型の公開講座を行っていました。主として私立大学の博物館で見学と講義をしていたのですが、数年後にはだんだん先細りして受講者数もあまり増えませんでした。

そこで、折から21世紀の生涯学習社会の本格化を迎えた時期ということもあり、博物館の支援にもなり、受講者にも喜

んでいたような、新たなスタイルの講座を設計し「ア・ミュージアム」「知」の玄関への招待―をスタートさせました。「ア・ミュージアム」という名称は「ミュージアム」と「アミューズ(愉しませる)」の複合語で、この新講座は、大学人として、また、大学の公開講座として、より広範な博物館の連携と受講者との橋渡しをするという趣旨のもとで考案しました。

2007年に開講した第1回は、早稲田大学會津八一記念博物館館長の大橋章先生にご登場いただき、受講者の集まり具合も良く、予想以上に好評をいただき、いいスタートが切れました。

明治大学博物館の公開講座ですから、当初は大学という範疇を超えることは難しいと思いましたが、他の博物館や美術館との交流の中でフィールドが広がっていきました。2008年4月から8月にかけて実施したパート3では、出光美術館、山種美術館、ブリヂストン美術館、サントリー美術館、三井記念美術館など、錚々たる美術館のご協力をいただき、9回シリーズで講座を行うことができました。こうしてフィールドが広がったことで、受講者の

実し、人材も豊かで面白いところがたくさんありますよ」

と声をかけていただきました。以前から企業博物館に興味・関心があったものから、2009年4月から8月のパート5は、「産業文化博物館編」として企業活動を通じて社会に貢献している企業博物館など10館で見聞を深めることができました。

### 2 博物館は「知」の玄関

#### 企業博物館は「体験」に強み 「知」を発見し、「肌ざわり」を体感

博物館の進化を歴史的に見ますと、最初は資料の保存重視型。次が展示型、その次に展示を見るだけではなく、講座を受講したりワークショップに参加したりという参加型。そして今、第4世代として体験型の博物館が社会から求められています。例えば紙の博物館では、紙すき体験ができました。電気史料館では、スイッチオンで灯りをつけてみる事ができました。企業博物館は、このような体験型の展示を提供できる強みを持っています。

生涯学習は本来、自分が学びたいことを学びたいときに、学びたいように学ぶものです。一般には座学が中心で、先生が教壇に立ってお話されるものが多いですが、「ア・ミュージアム」は、受講者が様々な博物館に実際に足を運び、現場で実物を見て、出会いや体験から学ぶものです。様々

保存型、展示型、参加型へと移り変わってきた博物館。今日では、ここに集積された学術資源や文化、英知など様々な価値を市民がじかに自分の目や手、心で体感する「体験型」の機能も社会から期待されている。こうした中で、生涯教育の一環として明治大学博物館が展開する「ア・ミュージアム」「知」の玄関への招待―は、受講者に博物館での学びの魅力を提供し好評を博している。その魅力はどこにあるのか、また博物館がますます市民に開かれた場となるためのテーマは何か。「ア・ミュージアム」を開講し、そのコーディネーターを務める明治大学の伊能秀明・中央図書館事務長に話してもらった。



皆さまのニーズにも一層マッチしてきたいと思っています。また、印刷博物館の榊山紘一館長(東京大学名誉教授)から「企業系の博物館にも資料が充

な博物館に様々な学びの場が用意され、「知」の入り口として最もふさわしいものではないでしょうか。

また、もう一つの強みとして、企業の肌触りを感じる事ができる、という点が挙げられます。企業の情報は印刷物やインターネットで発信されていますが、これは一方通行で流される情報です。しかし、企業の博物館や史料館などの現場に行くと、その企業の文化・風土、雰囲気や社員の人柄をじかに感じる事ができます。つまり、企業の本質を肌で感じ、ありのまま理解していただく事ができると思います。

### 3 予想外な受講者の反応

#### 受講者の好感と驚き 史料寄贈のきっかけも

「ア・ミュージアム」の受講者には、リピーターが多くいらっしゃいます。また、大学の公開講座では、時には高度な専門知識を持った受講者が難しい質問をするようなケースもありますが、「ア・ミュージアム」では、有名な時代考証家の奥様や元大学教授であっても、一般市民の受講者と和気あいあいと聴講される光景がみられます。受講後は

「この企業って、こんなこともやってたのか」

という気づきがあるようです。企業博物館はあくまで、社員や関係者の研修施設



で、一般の消費者は見学できないと早合点していたのに、意外なほど懐が深く

「どうぞお入りください」と招き入れるような所に好感と驚きを感じていると思います。

こうした学習体験が、家族や知り合いの方に口コミで広がっていったり、この次は孫を連れて来たいというお話をいただいたり、さらには受講者の中に戦前の地図やチラシを沢山お持ちの方がいて、受講会場の博物館で史料寄贈の話に進展するケースもありました。こういう時こそ、

「ここにお連れしてよかったな」と思う瞬間です。

### 4 市民と博物館の架け橋

#### 博物館はもつと敷居を低く 「ア・ミュージアム」は 市民との架け橋に

博物館は万人に開かれた世界です。しかし、例えば明治大学博物館にしても、

「卒業生じゃないんですが、一般人でも見られるんですか」

といったお問い合わせをいただき、土曜午後、日曜・祝日でも、年間343日、無料で開館しているとご案内したところ、びっくりされたことがあります。もつと敷居を低くし、門戸を開いて、いろいろな方々を博物館にいざなうことが博物館職員としての使命だと感じました。

私は、もともと奈良時代の律令を専攻していましたが、今は「知の水先案内人」になりたいと考えています。美術や伝統工芸、印刷文化の世界などを自分できちんと語ることはできませんが、

「こっちの方に行ったら、きっと面白いことがありますよ」といった渡し場の船頭の役割ができればいいと思っています。

現在はインターネットで画像を見ることがバーチャルな体験もできますが、家族や友達を誘って実際に博物館に行きたいと思う市民の方は大勢いらっしゃるはずですよ。そのような市民の皆さまと博物館との橋渡し役を務めたいと念じています。

「ア・ミュージアム」知の玄関への招待ー  
パート5 産業文化博物館  
2009(平成21)年4月から8月にかけて全10回にわたり、市民の日常生活に不可欠な題材を扱う産業文化博物館について見聞を広めた。

日程 会場

1	印刷博物館
2	たばこと塩の博物館
3	紙の博物館
4	電気の史料館
5	東芝科学館
6	渋沢史料館
7	物流博物館
8	花王ミュージアム
9	帝国データバンク史料館
10	アド・ミュージアム東京



1970（昭和45）年夏、作家・三島由紀夫が遺作となった長編『豊饒の海』4部作の最終巻『天人五衰―豊饒の海（四）―』（以下「天人五衰」）を執筆するため、帝国興信所に最期の取材に訪れた。その3カ月後の11月25日、三島は陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地で自決を遂げた。覚悟を秘めた中での取材と三島という人物像を、取材に応じた2人の社員の回想をもとに紹介する。

### 遺作『豊饒の海』を完結させ、自決 本年11月、40回目の「愛国忌」

三島由紀夫、本名平岡公威（きみだけ）は、1925（大正14）年1月、東京で生まれた。31（昭和6）年に学習院初等科に入學し、高学年時には早くも学友誌『輔仁会雑誌』に詩や俳句を発表するようになった。同中等科・高等科に進んでからの6年間も多くの詩歌や小説を発表し、41年には同誌の編集長となった。この年に手掛けた小説『花ざかりの森』から三島由紀夫のペンネームを使っている。

44年、学習院高等科を首席で卒業し、卒業式では昭和天皇から恩賜の銀時計を拝領した。同年、東京帝国大学法学部に



帝国興信所本社ビル 三島由紀夫が取材に訪れた帝国興信所本社ビル。「僕は大体こうした古めかしい煉瓦造りの建物の雰囲気が好きでしてね」と語っている

進学。在学中に川端康成のもとを訪ね、これが文壇への足がかりとなった。卒業後は大蔵省に入省。銀行局勤務の傍ら旺盛な創作活動を続けたが翌年9月に退官。作家業に専念することとなった。

以後、『仮面の告白』『潮騒』『金閣寺』『愛国』など、唯美的な作風に溢れた三島の作品が次々と発表されるが、長編『豊饒の海』4部作（1965～1970）が三島の遺作となる。

70年11月25日、三島は盾の会のメンバーと共に陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地総監室を占拠した後、バルコニーで自衛官とマスコミに自衛隊決起の檄を飛ばした。しかし、この決起は受け入れられず、三島は割腹自殺を遂げた。

この決起の日の朝、三島がライフワークと称していた小説『豊饒の海』最終巻「天人五衰」の最終稿140枚が新潮社の編集者・小島千加子氏に手渡され、この大作の完結をもって、自らの命も完結させた。今年11月25日は没後40回目の「愛国忌」である。

### 『天人五衰―豊饒の海（四）―』の 取材に帝国興信所を訪れる

『豊饒の海』は「春の雪」「奔馬」「暁の寺」「天人五衰」の4部作からなる長編小説である。輪廻転生をテーマとして、20歳で死んだ青年の生まれ変わりが、親友の目を通して次々と展開される。その最終巻「天人五衰」に、老弁護士（親友）

が自分の亡き友人の3回目の生まれ変わりとと思われる少年と養子縁組みをしようとするくだりがある。老弁護士は少年の身上を調べるために興信所に調査を依頼するのだが、その場面に執筆するために、1970（昭和45）年8月25日、三島は編集者の小島さんと一緒に帝国興信所に取材に訪れている。自決のちょうど3カ月前のことであった。

三島が訪れたのは、当時中央区・新富町にあった帝国興信所本社ビルだった。港区・青山への社屋の移転を1カ月後に控えたあわたたしい雰囲気の中であった。

小島さんによると「興信所を調べる男っていうの、どう？ ちよっといね、気に入ったよ」と、悦に入つて玄関をくぐったそうだ。当時、帝国興信所では企業信用調査に派生するサービスのひとつとして結婚・雇用に関する人事調査を行っていた。この人事調査は、81年に全面的に廃止されている。

取材に応じた当時の人事調査第1部長・藤沢宗治は、かつて帝国データバンク百年史編纂室が行ったインタビューで次のように答えている。

「あらかじめ終業時刻の4時半に会う約束をしていたのですが、その時刻に1分1秒違わぬ正確さで来られたのにはびっくりしました。几帳面な人柄については聞き知っていましたが、名刀のように切れ味のよい義理堅さでした」

### 取材の内容を忠実に文面に反映 3カ月後の自決の気配は皆無

三島の帝国興信所での取材の目的は、調査報告書の様式と記載項目を知ることだった。藤沢は調査員マニュアルと、内容を伏せた2、3の報告書フォームを見せた。三島は藤沢の説明をじっと聞いて、報告書の書式とフォームを見合せながら丹念に素早くノートをとっていたそうだ。

「三島さんには、あまりうちの報告書のス

# 戦後の日本文学の旗手 三島由紀夫

遺作『豊饒の海』の執筆に際し  
帝国興信所を取材



写真提供：毎日新聞社

タイトルにこだわる必要はないでしょうって言ったのですが、やはり現実的な感じを持たせるためにはきちんとしておく必要があるということでした」(藤沢)

この取材の結果は、「天人五衰」において別掲のように登場した。「受付番号」「貴番号」の表題様式から、氏名・本籍・現住所のほか、本人の事項の経歴現状・体質容姿・性格素行・趣味嗜好など、帝国興信所の各項目および記述の仕方にもいたる細部までもが再現されている。

藤沢は同人誌『砂』(1983年10月号)に「三島由紀夫の回想(上)」というタイトルで寄稿している。

「氏は(略)創作の過程にあつてその設定



『天人五衰—豊饒の海(四)—』(1977年刊、新潮文庫)の一部 三島由紀夫はこの小説の中で、帝国興信所での取材内容にほぼ忠実に、リアルな「養子縁組調査報告書」を創作している

地点の現実の景相や状況等について自身の眼で具体的かつ精細刻明に見直しをしなければ気がすまないのである。そのことによつて(略)登場人物の影像も生々しく現実化され(略)実像化し鮮烈に活きてくるのである」

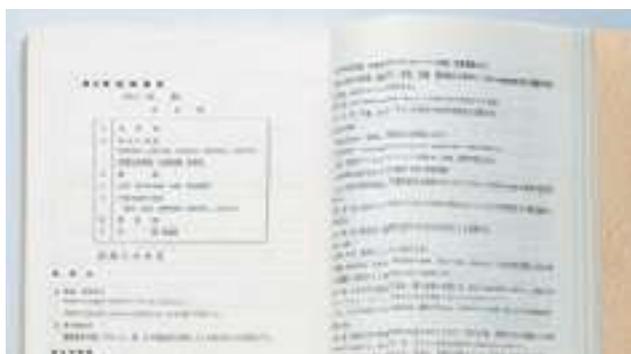
三島の現地、現物による取材は、調査報告書の様式のためだけに買かれていた。

取材自体は40分ほどで終わり、その後、午後6時頃まで応接室で雑談が続いた。藤沢によると三島は

「これで最終巻の『天人五衰』の取材は一応終了し、あとは整理して机上で原稿を書いてゆくだけです」

と、淡々として席を立ったそうである。この取材が三島の最期の取材となった。

三島の決起については、



『調査員必携』(1972年) 調査員の教育資料で、調査の進め方や報告書の書き方が解説されている。当時行っていた結婚調査報告書に関する記述もあった

「後から考えても全然ないんです。そこが凄いなだと思ふ。最終稿を見せてもらつてもね、ひとつも乱れがないんです。字勢なんかも素晴らしいですよ」

と語っている。新潮社の小島さんにも、気配はまったく感じられなかったそうだ。

### 過去には三島自身の信用調査が調査担当者も三島に親近感

実は、帝国興信所と三島との接点は、それ以前にも2度ほどあった。

この取材の15年程前の1955(昭和30)年頃、三島から直接、帝国興信所に人事調査の依頼があった。この調査を担当したのは、人事調査部の上野静であった。

上野は三島について、帝国興信所社内報『新樹』に「三島由紀夫を回想する」というタイトルで次のように綴っている。

「しかし、三島はごく平静で無雑作な服装をして現れると感歎丁寧に挨拶し、私を迎え入れた。そして彼は『実は依頼主は私ではなく友人に頼まれたのである』とつけ加えた。つづいて彼は、帝国興信所の歴史と業績を高く買い、調査は帝国興信所に依頼することにした(略)」

またこの時、三島は興信所の業務に興味を持ったようである。

「要件が終わると、彼は興信所の調査に膝を乗り出して興味ぶかく質問したが、やはり彼らしく質問は追求的で、知識欲の旺盛なところを見せていた。」

上野が三島から調査の依頼を受けてか



帝国興信所社内報『新樹』(1971年7月号) 三島由紀夫が自決した翌年の7月、かつて三島から調査依頼を受け、三島自身の信用調査も担当した上野静が思い出を綴っている

ら間もなく、今度は逆に三島自身の信用調査が入った。この調査も上野が担当したのだが、三島の行動半径が広く資料収集には苦勞したものの、奇行、奇癖、女性関係などまったく問題はなく、清貧で品行方正な生活ぶりが実証されたという。

上野はこの後、三島にこの上ない親近感を覚え、その作品に積極的に接するようになったという。それだけに、三島の自決には大きな衝撃を受け、一報を聞いた時には「脳天から背筋にかけて冷や水をかけられたようにゾーンとした。」という。

帝国興信所は三島由紀夫の最期の取材の舞台となった。そして自決の場所となった旧市ヶ谷駐屯地跡(現在は防衛省)の正面に帝国データバンク史料館が所在していることは、奇遇を超えた縁だと感じざるを得ない。

# 世界有数の紙の国 紙製造業

中国から日本に紙の製法が伝わって今年でちょうど1400年を迎える。和紙の上には政治や文化が花開き1000年を超えて今も生き続けている。一方、日本は世界有数の洋紙生産国となり、ビジネスや文化的な暮らしを支える膨大な需要に応えている。

「風流職人尽紙漉」橋本貞秀画（紙の博物館所蔵）



百万塔(写真左)と陀羅尼(写真右) 国家安泰を願って木製の三重塔が百万基作られ、770年に法隆寺、興福寺など10大寺に奉納された。塔身には呪文「陀羅尼」が納められたが、これは現存する世界最古の印刷物である(紙の博物館所蔵)

## 正倉院に世界最古の印刷物 1000年の時を超えて現代に

紙は中国で発明された。現存する世界最古の紙は、紀元前2世紀頃のものだとされる放馬漉紙(ほうばたんし)や瀨橋紙(はぎょうし)である。史書『後漢書』には、105年に蔡倫が紙を作って皇帝に献上したと記されているが、蔡倫は紙の発明者ではなく、改良者だったようだ。

紙は軽く、かさ張らないため、それまで記録媒体として利用されてきた古代メソポタミアの粘土板、古代エジプトのパピルス、西洋の羊皮紙、インドの貝多羅葉、中国・日本の木簡・絹帛より筆記性に優れ、世界中に広がっていった。

日本には610年、飛鳥時代に高句麗の僧・曇徴(どんちょう)が紙の製法を伝えた。以後、楮(こうぞ)の樹皮などを原料として、独自の和紙が生み出されていく。現存する最古の和紙は正倉院に収蔵されている。702年の日付がある戸籍用のもので、美濃、筑前、豊前で作られたものである。

また、法隆寺には刊行年代の明らかな世界最古の印刷物とされる「百万塔陀羅尼」が残されている。国家安泰を願って称徳天皇が木製の三重の塔を作らせ、塔身には和紙に印刷された一種の呪文である陀羅尼が納められた。770年、6年の歳月をかけて100万基の百万塔が完成。法隆寺、興福寺など10大寺に奉納された。現在も法隆寺に4万基ほどが収蔵されている。

近年、米国議会図書館など欧米の図書館では洋紙に印刷された書物の劣化が著しく、深刻な問題となっている。これらは19世紀中期頃から発行され、百数十年を経たものだが、この洋紙に比べ和紙の1000年を優に超える保存性には驚くばかりだ。

## 和紙の上に政治・宗教・文化の花が 江戸時代には人々の暮らしの隅々に

日本に紙の製法が伝播してから約100年後の奈良時代には、国教である仏教の經典の写経のために、また、古事記や日本書紀などの国史編纂や戸籍用にと紙の需要が増え、和紙の産地も九州から関東甲信越へと広がっていった。

平安時代初期には朝廷で使用する紙を「漉く官立の製紙場「紙屋院」が設置され、日本独自の「流し漉ぎ」の技法が確立されて生産量も増えていく。そして平安中期には国風文化が起り、平仮名・片仮名が発明されて、「源氏物語」「枕草子」に代表される文学や歌集、日記、さらには手紙などが和紙の上に花開き、今日にまで伝わっているのがある。鎌倉・室町時代には壁紙や障子など、住居のなかに広く取り入れられるようになった。

しかし、和紙はまだまだ高価なもので、紙漉きが全国各地に広まり、民衆にも行きたたつて黄金時代を迎えるのは江戸時代のことである。江戸中期の紙漉ぎの普及や流通に関する貴重な資料が、公益財団法人紙の博物館に所蔵されている。『新撰紙鑑』は当時市場に流通した紙のカタ



写真上：『新撰紙鑑』 1777年に発行された紙の一覧。各産地別の紙の種類・用途・寸法などが記されている。江戸時代の紙産地の状況を窺えるほぼ唯一の書（紙の博物館所蔵）  
 写真下：『紙漉重宝記』 1798年に紙問屋が発行した紙漉きの技法書。この書により、それまで各地の秘法であった紙漉きは広く農家の副業としても普及した（紙の博物館所蔵）

口グである。『紙漉重宝記』はそれまで生産者の二子相伝の秘法であった紙漉きの技法を分かりやすく図解させたもので、和紙の製造は農家の副業としても広まっていた。生産量の増大とともに、和紙は民衆の暮らしや文化を豊かにしていく。瓦版、浮世絵、滑稽本などの出版を始め、傘、提灯、障子などの生活用品、さらには工芸品、人形、玩具など、和紙の用途は暮らしの隅々にまで行き渡った。

## 西洋経由で伝わったもうひとつの紙 日本は世界第3位の洋紙生産国に

紙が中国から西方に伝わったのは日本より約400年遅いが、14世紀までにヨーロッパの各地に製紙工場が作られた。15世紀中期にグーテンベルグが活版印刷を発明すると紙の需要は高まったが、当時まで、紙の主原料は亜麻や木綿のボロであり、原料は不足していた。19世紀初期には機械化が進んでイギリスで連続抄紙機が誕

生し、中期には木材から碎木パルプ、化学パルプの製造に成功して、現在のような大量生産が可能な紙、いわゆる洋紙が誕生した。

明治時代を迎えて、日本でも洋紙製造工場が作られる。1874（明治7）年、東京日本橋で有恒社（後の王子製紙に吸収合併）が、翌年、抄紙会社（後の王子製紙）が東京北区王子で操業を開始した。抄紙会社は73年、渋沢栄一が三井、小野、島田の3豪商とともに設立した。渋沢は72年、製紙事業を官業として行うべきだと政府に建議していたが受け入れられず、洋紙製造業は鉄道、鉱業、製糸業、造船業など、官業主導のいわゆる殖産興業ではなく、民間が起こした産業であった。

洋紙は当初、ボロが原料で品質も粗悪だったが、80年代には国産の稲わらパルプ、木材パルプの開発に成功し、この間、77年の西南戦争で新聞や号外が売れ、また欧化主義の台頭により雑誌、翻訳小説などが繁栄して洋紙の需要は増大していく。90年代の初期には、洋紙の生産は和紙を追い抜き、1914（大正3）年、第一次世界大戦が勃発すると洋紙の需要は更に伸び、輸出も激増した。

一方、洋紙製造業の整理統合も進み、33（昭和8）年、王子製紙は傍系の富士製紙、樺太工業を合併してシェアは85%となり、敗戦時まで寡占状態が続いた。

49年8月、王子製紙は過度経済力集中排除法により3社に分割され、

洋紙製造業は戦後の新たなスタートを切った。その後の高度経済成長、情報化社会の到来等と共に洋紙製造は成長を続け、今日、日本はアメリカ、中国に次ぐ世界第3位の紙生産・消費国である。

## 膨大な需要に応える洋紙 希少な価値に込める和紙

洋紙は紙（新聞用紙、印刷・情報洋紙、包装紙、衛生用紙、雑種紙）と板紙（段ボール原紙、紙器用板紙、その他）に種別され、年間生産量は約3000万トン。ピークとなった2000（平成12）年以降、ほぼ横ばいで推移している。国民1人当たり消費量は約250Kgである。コンピュータリゼーションにより、かつてはペーパーレス社会が進展するとの予測もあったが、紙の消費量はむしろ増加してきた。

一方、和紙は1901（明治34）年に約



最新鋭の抄紙機 王子製紙富岡工場のN-1マシン。製品最大幅9,180mm、日産1,000トン。1分間に1,800mの高速で微塗工紙、A3コート紙を生産。近代的な抄紙機が今日の膨大な洋紙需要に応えている（写真提供：王子製紙株式会社）

7万戸で漉かれていたものが、1000年後には400戸弱、現在では300戸弱と、今なお減少を続けている。  
 しかし現在、日本の手漉き和紙は、その美しさや風合いにおいて工芸品の域に達するものも多く、世界各地の文化財の修復にも欠かせないものとなっており、その価値は高く希少だ。

こうした中で本年春、『日本の心 2000年紀和紙總鑑』が刊行を迎える。現在全国各地で漉かれている和紙の1000点以上が収められる見本帳で、その時代を代表する和紙の集大成としては、現代版『新撰紙鑑』とも言うべきものだ。  
 発刊に先立ち、昨年9月から10月にかけて紙の博物館で、収録される和紙の一部を紹介する企画展「手漉き和紙に今」日本心の2000年紀『和紙總鑑』が開催され、大好評を博した。

膨大な需要に応えて、日々の暮らしやビジネスを支える洋紙。1000年先までも文化や心を伝え、遺す和紙。日本は、世界有数の、紙の国である。

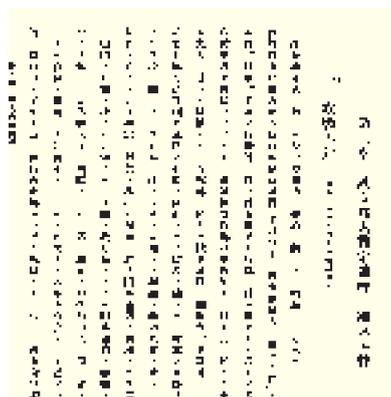
## 戦前期の中国渡航に不可欠な 「渡支」申請書類

帝国データバンク史料館が所蔵する史料の中に、帝国興信所2代目所長、後藤勇夫の「渡支事由証明願」と「渡支身分証明書下附願」の写しがある。どちらも1944（昭和19）年に中国に渡航するために作成されたものだ。

「渡支事由証明願」は北京在住の日本領事館警察署長宛てに、「渡支身分証明書下附願」は築地警察署長宛てに出されている。これらの証明書はどのようなものなのか。

幕末以降、海外への渡航には旅券（パスポート）が必要だった。1878（明治11）年には「海外旅券規則」が定められているが、当時は、中国への渡航の際には旅券は必要なかった。

しかし、1937（昭和12）年8月31日、米三機密合第3776号外務次官発各地方長官宛依命通謀「不良分子の渡支取締方に関する件」が発せられ、素性、経歴、平素の行動からみて不正行為を行わないと

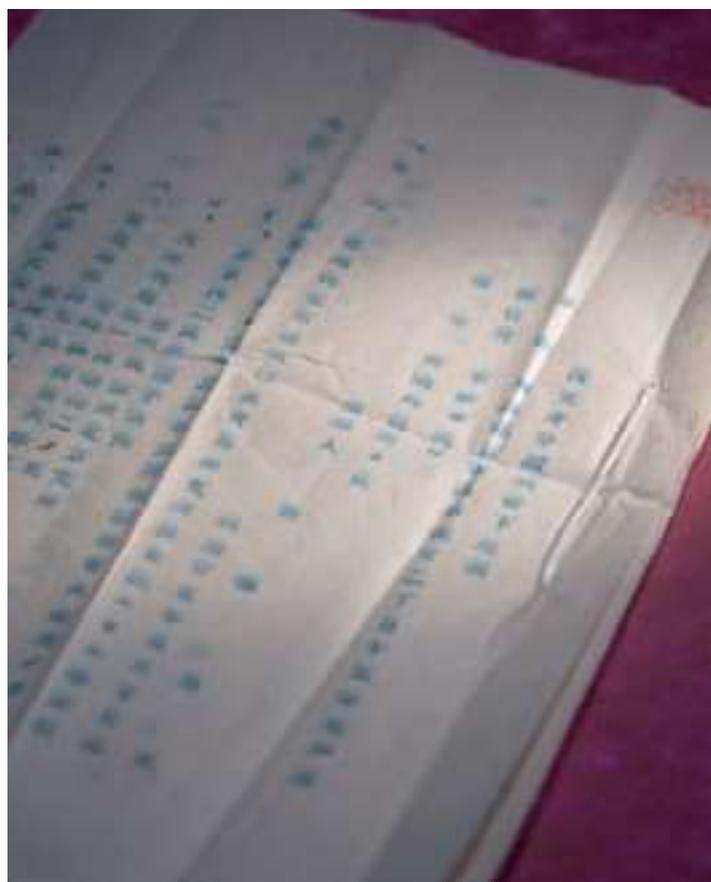


「渡支邦人暫定処理に関する件」 1940年の閣議決定により、中国への渡航に関する新たなルールが定められた（『外事警察執務要覧第一輯』、国立公文書館所蔵）

### シリーズ | 史料との対話 |

# 「渡支」申請書類に見る 事業所巡視

帝国データバンク史料館は、戦前期における中国への渡航に不可欠で、外交史料としても貴重な「渡支」申請書類を所蔵している。帝国興信所2代目所長後藤勇夫が、1944（昭和19）年に申請したもので、同時に、歴代社長自らの現地現認を象徴する事業所巡視の資料でもある。今回は、社長の現地視察とかつての海外展開の歴史を紹介する。



認められる中国への渡航者に身分証明書を発給することとなった。

さらに、40年5月7日の閣議決定により、渡支に関する新たなルールが定められた。「不良分子の渡支」を制限しても中国への渡航者は膨大で、この影響もあつて現地において円と連動する円系通貨（聯銀券、軍票等）の膨張が著しく、その価値の維持が喫緊の対策であつたからだ。この閣議決定は、「渡支邦人暫定処理に関する件（一）取扱方針」と題されたもので、次のように記されている。

「一般に視察を目的とする支那渡航は当分の間之を禁止することとし其の他特に支那渡航を要するものに対しては左記に該当する場合に限り所轄警察署長に於て身分証明書を発給して渡航せしむるものとす」

ここで「支那渡航を要するもの」とは、演劇、家事用務、商取引、定住または現地勤務、その他やむを得ない事情があるものと列挙されている。勇夫の渡航は商取引に該当し、この場合の手続きは（一）取扱方針に続く「（二）取扱要領」で次の通り詳細に規定されている。

「在支関係会社商店又は取引先との間に現実に商行為存在し又は具体的なる商業推進者にして渡支せざれば真に処理し難き事情ある取引の場合に於いて在支所轄領事館警察署長発給の証明書を所持する者」

以上の規定から、勇夫の渡航に際して、築地警察署長に「渡支身分証明書下附願」を、北京領事館警察署長に「渡支事由



「渡支事由証明願」 1944年に勇夫が中国へ渡航する際の滞在先や目的、中国での保証人などが記されている

証明願」が提出された。

では、勇夫の渡航が許可された理由は何だったのか、「渡支事由証明願」には次のように記載されている。

「渡支を必要とする事由

張家口、青島各支所長更迭に伴う事務引継ぎ並に左記各支所業務監督及監査の爲昭和19年10月1日より同11月30日迄2カ月間渡支滞致し度し」

この時の巡視先は、奉天、天津、北京、張家口、太原、青島、濟南、徐州、南京、上海の10カ所の事業所であった。

帝国興信所は44年に中国、台湾、朝鮮、南樺太に25カ所の海外事業所を有していたが、この頃はすでに本社と大陸各事業所との連絡に支障が出始めていた。

一方、国内ではこの年、年間調査件数は最盛期の3分の1にまで落ち込んでおり、海外支所の状況把握と管理監督は急務であった。また、勇夫が中国に渡つ

た11月から翌年にかけて、東京がアメリカ軍による初の空襲を受けた。まさに、戦火をかくぐつての海外事業所巡視であった。

### 帝国興信所の海外進出 日中戦争を機に本格展開

帝国興信所の戦前期における海外事業所開設は累計で29カ所を数えていた。そのうち11カ所が初代所長後藤武夫の時代に、18カ所が二代目所長勇夫の時代に開設された。初の海外支所は1913（大正2）年に開設した京城支所であった。

武夫は17年に中国、20年には欧州・米國を視察した。この2回の海外視察は、大陸各地への進出の可能性や海外の興信業の状況を知り得たという点で大きな収穫があり、以降、海外事業所の開設が進んでいった。21年4月には中国大陸で初の上海支所が開設された。

「興信事業の極めて幼稚なるものあり、是れを以て以前数度外国人によりて同事業を



「海外旅券下付表」 1920年、武夫はフランス、イタリア、イギリス、アメリカなど欧米各地をまわり興信業の状況を視察した（外交史料館所蔵）

企てられし事あるも何れも失敗に終れり」これは上海支所設立準備時に行われた現地報告である。興信事業に対する現地での理解の浅さが危ぶまれる中、上海支所は開設10日間で40社近い加盟会員を集めた。日夜問わず精力的な勧誘活動に馳駆した社員の努力による功績は大きい。その影で海外視察の際に、武夫自ら上海に進出した企業や銀行各社を訪問し、支援を要請していたことも会員獲得の布石となっていた。

続いて23年8月には樺太にも進出している。さらに、24年6月には平壤支所、26（昭和元）年3月には台北支所と、海外事業所の開設は順調に推移した。

武夫の晩年には、満州（現・中国東北部）での事業展開が大きな懸案となっていた。32年3月の「満州国」建国を経て、当時すでに、満蒙方面での調査依頼が激増しており、提携先の現地連絡機関のみでは顧客の要望に答えられない状況であった。早速、新京、奉天、大連で現地調査が行われ、結局、32年7月、満鉄本社をはじ



帝国興信所2代目所長後藤勇夫  
勇夫は、1939年からの5年間で延べ11回、海外事業所を巡視した

め金融、大手商社、一般企業が多く立地していた大連に事業所が開設された。大連は満州ではなく関東州であった。武夫は満州への進出を熱望していたが、それがかなわなかったのは次のような理由によるものだった。

「建國日尚ほ浅き満州國の經濟方面は、未だ混沌として手の着けやうがなく、随つて今日直ちに新京及び奉天等に支所を開設することは、聊か冒險的の嫌ひある」

そして33年に武夫が没し、勇夫の代になつてから、日中戦争を契機として再び海外、特に中国への積極的な進出が始まる。

勇夫は39年4月、大連、天津、新京、北京など9カ所を視察してすぐさま事業所の開設準備を進めた。そして同年5月の天津支所を皮切りに、6月の奉天、8月の北京、10月の新京、濟南と次々に新たな事業所が開設されていく。その直後の同年10月、勇夫は再び中国に出張した。これが勇夫による第1回目の海外事業所巡視だ。

以降も、40年に2回、41年に1回、42、43、44年には各2回と、冒頭の「渡支」申請書類による視察まで、延べ11回にわたって海外事業所巡視を敢行している。



帝国興信所天津支所集合写真 1942年、勇夫が巡視に訪れた時の写真。上海に次ぐ中国第2号支所として1939年5月に開設した天津支所。天津での事業所設置を皮切りに、帝国興信所の中国大陸進出は加速していく

### 勇夫の事業所巡視は 経営トップの「現地現認」

その巡視先の状況はどんなものだったのだろうか。かつて帝国データバンク百年史編集室が行った取材からその一端が窺える。大連支所の2代目支所長佐々木恵三の子息・欣一さんの話では、  
「職員は最盛期、調査員が5名、女性タイピストが1名、それに書生が1名いた。太平洋戦争が始まり、日中戦争が泥沼化するなかで、満州各支所の調査員が次々と応召していき、人手不足が顕著となり、支所長は時、奉天、新京、哈爾濱、牡丹江など満州各支所長を全て兼任、自ら現地調査に向くこともあった」といふ。

また、43年に満州帝国興信所（43年3月、旧新京支所を「満州国」の現地法人化）に赴任した業務部長石川長一郎の子息・信夫さんによると

「業務部長を除く調査員が日本人3名、朝鮮人1名の計4名、タイピスト2名、通訳1名、給仕1名の総勢9名の体制であった。戦局が激化するに従い、戦争末期には業務部長以外の社員はすべて応召し、近隣の奉天、哈爾濱の2支所も調査員がいなくなり、業務部長が一人でカバーせざるを得ない状況となった」といふ。

本土空襲が激しさを増す中で、国内の各事業所の経営が危機的な状況にあっても、勇夫の海外事業所巡視は44年11月まで続けられた。

帝国興信所は1900（明治33）年3月、日銀系の商業興信所、東京興信所という2大興信所を追って設立された。やがてこの先行大手2社に追いつき追い越し、30年代半ばには帝国興信所が他社を一步引き離しつつあった。その大きな原動力となったのが、絶えず取り組んだ調査報告書の質の向上であり、調査活動に「現地現認」という鉄則を据えたことにある。調査員が自ら調査先に足を運び、自分の目で見なければ確かな情報は得られないというものだ。勇夫の海外事業所巡視は、経営において発揮された「現地現認」であり、もちろん、国内事業所においても同様であった。事業所巡視は32年11月に副所長に就任した時から始まっている。所長代理としてまず大阪本部、神戸支所、京都支所、名古屋

屋支所の4大支所を訪れた。翌33年1月にはこれら4大支所に横浜支所を加えた5大支所を訪れ、同年2月の所長就任後、さらに関西方面、東北、北海道、樺太の各事業所を巡視し、以後も毎年巡視を欠かしたことがない。戦前期の約13年間だけでも、巡視先は延べ約250カ所に達しており、特に44年には年間で国内延べ78カ所に加えて、前述のように海外を2回にわたり巡視していた。

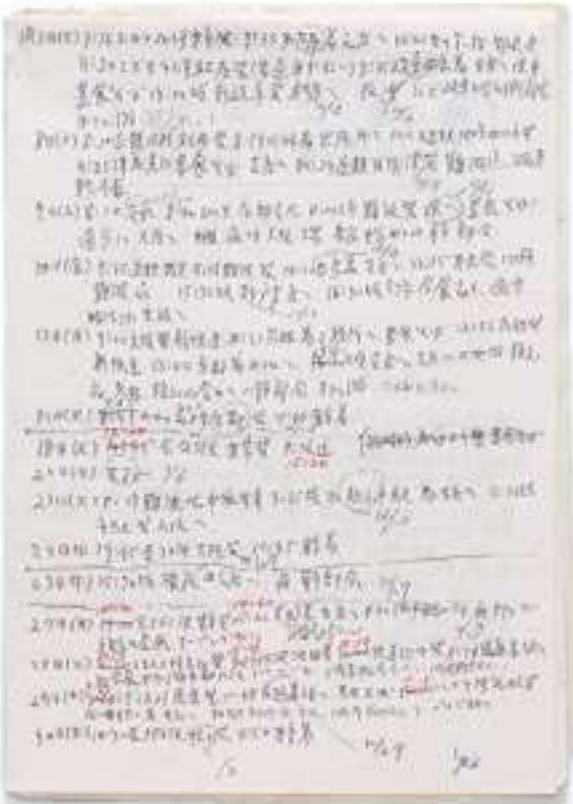
### 義夫はさらに精力的に 今も続く社長の事業所巡視

この経営トップによる事業所巡視という「現地現認」は、1963（昭和38）年、勇夫の死去に伴い3代目社長（呼称をそれまでの所長から社長に変更）となった後藤義夫にも引き継がれている。

義夫の事業所巡視は、勇夫にも増して精力的であった。毎年、約80カ所に及ぶ国内事業所の全てを巡視し、つぎに各地の経済・業界動向に触れ、また、各事業所の運営状況を捉えていた。さらに、中立的な立場で情報を収集し、提供する信用調査機関として、地元の新聞社などマスコミの要請に応じて、経済情勢や与信管理などのテーマでインタビューに応じ、その記事が報じられた。

この経営トップによる事業所巡視は帝国データバンクのDNAともいべきもので、現社長の後藤信夫にも引き継がれて、今日にいたっている。

冒頭の「渡支事由証明願」と「渡支身分証明書下附願」は帝国データバンクにとって社長による現地現認の起点となる資料であり、同時に、かつて存在した海外事業所の記憶との接点でもある。



3代目社長後藤義夫直筆のスケジュール 毎年、約80カ所にも及ぶ事業所巡視のスケジュールを義夫自ら記入していた

## 心身修練の道場「至誠館」

— 後藤武夫自宅敷地内に建設 —

右の写真は、1928(昭和3)年、「至誠館」の開館式を捉えた一枚である。勇ましい顔をした道着姿の青少年たちの中央で、腕組をする創業者後藤武夫の姿が見られる。京橋区木挽町(現・中央区銀座)の武夫の自宅前で撮影された。立て看板には「大禮記念青年団練武場至誠館開館」とあり、この看板に向かって左側は武夫の自宅、右側が「至誠館」である。

举行された。参加者は、帝国興信所青年団の柔道部や木挽町1丁目青年団有志、その他参加申込が受理された少年たちである。総勢100名を越える館生は、午前7時20分から八丁堀の氏神鐵砲州稲荷神社に参詣し、開館式後は紅白に分かれて試合も行った。多数訪れていた館生の父兄も大いに盛り上がり、開館式は盛況裡に幕を閉じた。

「<sup>しかん</sup>斯館に学ぶものをして<sup>ことごと</sup>悉く至誠の人たらしめんとする」

武夫の主義信条をもとに「至誠館」と命名されたこの建物は、帝国興信所青年団の心身修練の道場として、武夫の自宅の建築と同時に設けられた。帝国興信所青年団は、23年に京橋青年団の分団として帝国興信所内で結成した青年団である。広さ13坪余あった道場は、帝国興信所青年団以外に周辺の青少年にも無料で開放され、帝国興信所で受付を務めていた講道館5段藤田長盛などが柔道を教えていた。

「至誠堂」開館式は、5月20日午前8時より



## 史料館 TOPICS

### 帝国データバンク史料館 特別企画展のご案内

帝国データバンク史料館では、帝国データバンク創業110周年記念事業の一環として、2010年3月から「帝国データバンク史料館特別企画 日本の会社展第2回 “輝業家”―古往今来―」を開催する。

前回の「老舗」に続く第2回目は、近代日本を造り上げた「企業家」「実業家」をテーマに掲げる。その人物像や輝かしい実績を通して、青少年に働くことの意義、好奇心、創意工夫の大切さを伝え、今日の世界規模の不況の中で、企業人や起業人に有益な情報を発信していく。

また同時開催として、世界の子供写真、江戸時代の子ども浮世絵を展示する「ヨクマナビ、ヨクアソベ」、110年間の歴史を紹介する「帝国データバンクのあゆみ―飛翔跳躍―」も実施。

会期中は常設展示もあわせ、通常は休館日である土日祝日も開館する。ホームページでも特別企画展に関する情報を随時更新する予定である。

## ご利用案内

ご来館の際には館内のご案内、ご質問など、お気軽にお申し越しください。  
なお、当館ホームページで展示内容や最新ニュースなどをご紹介します。

<http://www.tdb-muse.jp/>

## 開館のご案内

[開館時間] 10:00～16:30(入館は16:00まで) [休館日] 土・日・月曜日および祝日 / 年末年始(其他展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。) [入館料] 無料

## 交通のご案内

[JRご利用] 中央線・総武線 市ヶ谷駅から徒歩8分 / 中央線 四ツ谷駅四ツ谷口から徒歩9分

[地下鉄ご利用] 南北線・有楽町線 市ヶ谷駅 7番出口から徒歩6分 / 都営新宿線 曙橋駅 A4番出口から徒歩9分 / 丸の内線・南北線 四ツ谷駅 2番出口から徒歩9分



帝国データバンク史料館だより Muse Vol.11 2010年1月発行

<http://www.tdb-muse.jp/>

〒160-0003 東京都新宿区本塩町22-8 TEL. 03-5919-9600(直通) ※ご来館の際は、1F受付にお越し下さい。